特集「グループウェア」の編集にあたって

松下 温[†1] 白鳥則郎[†2] 大岩 元[†3]
西田正吾[†4] 岡田謙一[†1] 山上俊彦[†5]

社会的な動物である人間は，本質的に協調活動を行って社会生活を行っている．近年コンピュータの能力向上にともなって，これを用いた人間の協調活動の支援が可能となり，そのための技術である「グループウェア」に社会的な関心が集まり出してきた．「グループウェア」は狭義にはグループワークを支援するソフトウェアを意味するが，広義にはハードウェアや通信システムまで含めて「グループウェア」と呼んでいる．

ワープロやパソコンの使用が個人の思考のスタイルを変えて，知的活動に大きな影響を与えたように，「グループウェア」は今後，組織の在り方，仕事のスタイルまでを大きく変える可能性がある．従って，「グループウェア」は日本の社会の本質を反映したものである必要があり，わが国独自の研究が必要となる．

情報処理学会に組織された「グループウェア研究会」では，これまでに，毎年50件以上の優れた論文が研究会で発表されている．この分野は，マルチユーザのユーザインタフェース，高位通信プロトコル，協調行動支援，意思決定支援，組織コンピューティングなど，情報処理，通信処理，組織科学，行動科学，など，複数の人間が共同作業を行う上での基盤技術から，理論，応用まで，幅広い分野を含み，活発な研究がなされている．全国大会においても複数のセッションで活発な議論が行われ，会員の関心も高まっている．

研究会も開催初年度から420名を超える登録があり，毎回，多くの参加者が熱心な討論を行ってきた．これまでに，研究会で発表された多くの論文が研究会での議論をもとにして改善され，ACM, IFIPなどの国際会議で発表されている．

「グループウェア」は，情報処理，社会科学両面からのアプローチと比較的長期間の評価が必要であるとともに，学術分野としてまだ発展段階にあり，さまざまな手法が混在している．このため，比較的論文誌に掲載されにくいという傾向があり，情報処理学会の論文誌に発表されるものが多くないという状況にある．

こうしたなかで，「グループウェア研究会」主催の研究会，シンポジウムで発表あるいは投稿された論文を中心として，「グループウェア」に関する優れた論文を広く集め，一括掲載することにより，この分野での優れた研究成果をとりまとめることは，情報処理学会としても意義のあることである．

そこで，「グループウェア研究会」の主査，幹事を中心に「グループウェア」特集の企画を論文誌編集委員会に提案し承認されたので，昨年2月，会誌35巻第2号に論文募集の会告を出したところ，締切までに31件の論文の投稿があった．

その後，本学会論文査読規定に従い，通常の査読手続きに従って論文の査読を依頼した．その結果，現在までに9編が採録となり，その他一般論文の中から「グループウェア」を扱った論文2編とともに，合わせて11編を本特集の論文とすることができた．

査読期間が短かったため，査読者や著者には，たいへん無理をお願いすることになったが，提案者一同，御協力に深く感謝する次第である．

†1 慶應義塾大学理工学部計測工学科
†2 東北大学電気通信研究所
†3 慶應義塾大学環境情報学部
†4 大阪大学基礎工学部システム工学科
†5 NTT通信網総合研究所